

第1圖 峠

第一 峠

山間の村

山にかこまれた村がある。

冬は雪に埋れてゐる。夜は山々の
木に木枯こがらしが鳴りな、犬の聲がわびしく
そのなかへ消えてゆく。

春は、まづ段々だんぐ畑に見えるであら
う。土の色は黒くなり、その黒い色

を見ると間もなく、いたるところに草の芽が出てゐるのに氣づく、木の芽がふくらみ、花が咲き出す。それからすぐに初夏がつき、黄色い麥が刈りとられる頃には、この村に短い夏が来てゐるのだ。さうして今度はこの山里のむせるやうな青葉の闇を占領するのは河鹿の啼き聲と、規則正しい水車の音である。

たうもろこしの葉が、はた／＼となるのをきけば、人々はすでに秋が訪れてゐるのに氣がつくであらう。

かういふ山にかこまれた村には、人家はいふまでもなく少い。そしてその古びた家々の数は増えることがない。田も畑も増えることがないし、山の仕事も決して増えることはない。彼等はこの里に、何故に祖先が家を建て、住みついたのかを考へることもしないであらう。

祖父も、父もその若い頃には山を越えて他郷に出て働いた。いまは兄が姉が山を

越えて遠くへ行つてゐる。

山にかこまれたこの里に残されたのは、丁度この村にある仕事を取運ぶことの出来るだけの人々であつた。

年老いた父や母を助けて、この村に生れた少年たちは野良や山の仕事をしなくてはならなかつた。

鮮かな夕焼の下に、山々は紫色である。その静かな山の向ふには、少年達の知らぬ世界があつた。

山にかこまれてゐるとはいつても、この村のなかを河は絶えず流れてゐる。その河に添つて下つてゆけば、やがて自分達の村では想像もつかぬやうな、廣々とした、豊かな平野がひらけてゐることを、少年達も知つてゐる。しかし、それは餘りにも遠い世界であつた。それよりもこの山里の人々にとつて親しいのは、山を越えて、

隣りの村へゆく道であつた。

その道は北にある。東にもある。西にもあつた。連つた山々のその一番ひくいところは、隣りの村の空が一番近しく見えるところであつた。向ふの空の夕焼が、一番長く見えてゐるところであつた。

その低いところを指して、自分達の村から、山腹さんぶくをぬつて、細い道がうね／＼と續いてゐる。

人々は、そこを越えて他郷なまきへ出てゆくし、またそこから戻つて來た。

少年達の志こころざしは、その山の道を越えてゆくことであつた。また父や兄が、親しい人々が、その道から歸つて來ることは、何といふたのしい、うれしいことであつただらう。

ある時は、その道を越えて姉は花嫁はなよめの姿で行つてしまつた。ある夕方には兄が馬を引いて、そこから歸つて來た。

それらの道は、遠い昔から人々によつて踏みかためられ、そして細々としてゐたものがだん／＼道らしい道になつたのであつた。

この、山を越えてゆく道の一番高いところを、峠たうげといつてゐる。峠は道ののぼりと下りの分れるところであるが、連つた山のなかで一番ひくいところが多くは選えらばれてゐる。

むかしから山を越えてゆく人々が、このやうなところを選んだのは自然のことであつた。

峠には、大きな峠もあるし、小さな峠もある。峠道にはけはしいのもあれば、なだらかなのもある。しかしいづれも、一つの村や谷から、他の村や谷へ、山を越えてゆく道であることにちがひはない。

第2圖 山の波



地球上のいたるところに山がある。その山の起伏のさまは、飛行機につて飛んで見れば、最もよく見ることが出来るであらう。飛行機にのるとの出来ぬ人は、航空写真を見るがよし。

山々の波のやうな起伏のなかに、點々として、村が、部落が見えるであ

らう。さうした部落や村と他の部落や村のさかひには、必ず峠があるにちがひない。いつでも、峠の此方と向ふには少しづつ、ちがつた世界がある。そしていつでも、峠の向ふは人々の憧れの世界であつたにちがひない。

峠への道は、谷間から出て、山々の中腹をぬひ、のぼりのぼつてゆく。峠につくと急に展望はひらけ、いままで見えなかつた、他の世界が一度に自分の目に飛び込んで来るのだ。そこには憧れの、暖い明るい世界がある。さうしてまた見も知らぬ不安の世界がある。いままで自分の住んでゐた村は谷底の木がぐれに見え、のぼつて来た細い山道もまたすではるかのものであつた。

峠に立つ者は、いつもこのやうな思ひを味ふであらう。

山が大きければ、峠も大きい。インドからヒマラヤを越えてチベットに行く峠の道などを思つて見るがよい。アルプスの山々の姿を思ひ、その山の兩側にある國と

國との交渉かうせふを考へて見るとよい。

雄大な山脈さんみやくには、大きな峠が人々を待つてゐるであらう。

人々はみなその峠を越して、憧れあこがの他郷へ出て行つた。その峠を越えて自分の憧れのものを求めて行つた。だからして、峠にのこる歴史は、國と國との、村と村との行交ゆきかひの歴史である。

心急く峠

多くの峠はすでに人々に忘れられた。しかし、はげしい文明ぶんめいの進み方と歩調ほてうを合せることの出来ない、山間の村々の間にある峠は、いまでも昔のまゝの用途ようどを持つてゐるであらう。

おほしまりやうきち
大島亮吉といふ人の『山』といふ本を讀んでみると、そのやうな峠での出来事を

のべたのを見出した。

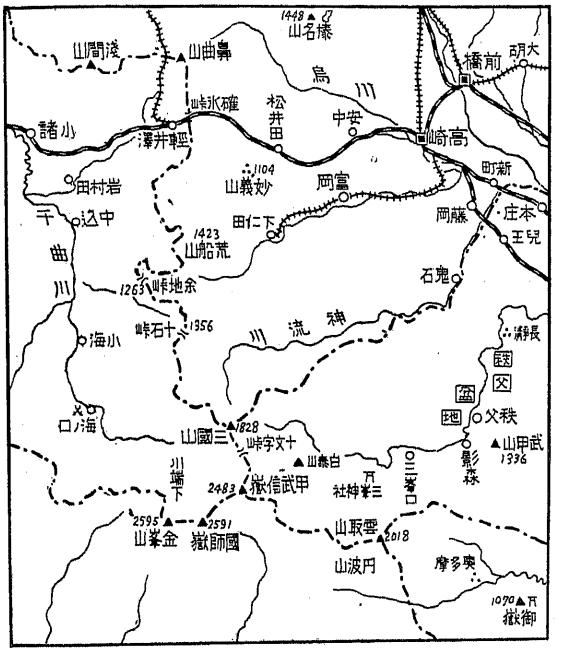


第 8 圖 十文字峠にて

『ある秋も半ば、それは十文字峠たうひを梓山あつさへとこえたときのことであつた。ちやうど山々は美しい錦きん繡しゅうの季節きせうの衣裳いじやうをつけてゐた。白はく泰山たいざんのところまで枳本ちほんからのぼつて来たとき、私は峠路たうひぢで幼な兒おきなこを背せにあぶつた四十あまりの土地の

人らしい男が、なにか紙を手にもつてうろろしてゐるのに行き會つた。彼れは私

らを見て、ほつとしたやうに安堵あんどの面持おももちを浮べて、すぐさまこれから秩父町ちちぶまちまでの



第4圖 十文字峠

下の村のもので、その
 幼児が熱病にかゝつた
 ので、一刻を急いでい
 ま醫者のところへかけ
 るといふのだつた。川
 端下からよ醫者のゐ
 るところへゆくには、
 千曲川沿ひに佐久の岩
 村田へ出るよりも、こ

とめられた。私たちは道程のことを話してやつた。さけば、その人は金峯の下、川端道程をたづねた。その顔には深い憂愁と不安の色が、ただよつてゐるのがすぐにみとめられた。私らは道程のことを話してやつた。さけば、その人は金峯の下、川端

の十文字峠をこして秩父町へゆく方が時間にして早いと教はつて来たのださうだ。

けれど、その人はまだ一度もこの峠をこしたことがないので、村の人から半紙に繪圖を書いて貰つてやつて来たのだつた。背中の子は熱にうなされてたえず低い呻きをあげてゐた。まさに峠は紅葉のま盛りのとさだつた。父親は眞紅に色づいた楓の小枝を一本折りとつて、それを片手でたえず背中の子の目の前に振り翳してあやしなながら、挨拶をのこして足早に曲折の多い峠路を降つて行つた。その姿はすぐと路にかくれてしまつたけれども、その秋の曇り日の小路の水のやうにしんかんとした静けさのなかに、次第に薄れてゆくあの病児の低い呻きの聲のみは、しばらくのあひだ私らの耳にのこつた。』

このやうな哀しいことの起る山村は、だん／＼に少くなつて行くであらう。しかし、いまでも醫者のゐない村は澤山にある。自動車も越えてゆかぬ峠の向ふのわびし

い村々が、まだ――澤山にのこつてゐるのである。

峠路を歩くにも、登山やハイキングならば楽しいであらう。しかし、そののぼり下りを急がしい、心せく用事をもつて歩く人にとつては、峠は何といふいまゝしいものであるだらう。

心急くものは苦しいのぼりがつきたときも、峠の眺めを楽しんでゐることは出来ないであらう。その時、人々は峠のあることを嫌に思ふ。峠の上を身も軽々と風につて飛んでゆく鳥を羨しいと思ふだらう。また山の脇腹わきはらを突きぬけて向ふへゆくことが出来たらどんなによいかと考へるであらう。

かくて、人々は隣り村、隣りの國との交通が、最も速かに出来る方法を工夫せずにはゐられなかつた。峠の道は少しづつ切りひろげられて行つた。急な坂は、遠くへ廻つて避けるやうにした。籠かごが通り、馬が通り、やがて自轉車の道となり、自動車

車の道となつた。

村には小さな電信局も出来た。

地球上に起るあらゆる出来ごとは、一瞬いつしゆんにして、すみぐまで知れわたることを欲してゐるやうに見える。昨夜地球の反対側に起きたことは、今朝は私達の耳に入り、夕にはその寫眞を新聞で見ることが出来る。

かくて、いまでは昔峠ののぼり下りをしてゐたやうなそんな悠長いぢやうなまはり道をしてゐることはだんぐに少くなつていつた。

まづ第一に割合に人の多い村と村との交通が烈しくなり、不便な道を便利にするために努力が拂はれた。

人の多く住むところは、いひかへれば産業は盛んのところであり、物が豊かのところである。そのやうな二つの村や或は國の間にある交通上の不便をだんぐに取

のぞくことに、人々は努力して來た。

やがて鐵道が出来てから、このやうなことは、一層急速に進歩をして行つたのである。

鐵道による交通は、いままでの、どんな交通よりも樂であつた。

だからその鐵道が、遠廻りをしてゐても人々はそれに對して不平はなかつた。いままですべて峠を越していつたり、苦しんだりして到着した目的地へたとへそれ以上の時間がかかつたり、費用がかかつたとしても、ともかく汽車の中に腰かけてゐれば着くといふことで満足した。

かういふ實例を私達はいくらも見ることが出来る。しかし人々は次第にそれだけでは満足出来なくなつた。

他のものゝことが急がしく動いてゐるのであるから自分たちも出来るだけ迅

速にしなくてはならぬ。さういふ要求が出るのは當然のことであつた。

峠の出来る所

すでに私達は、峠といふものが、村と村、國と國との間に山があるとき、そこを越えるに最も便利なところが選ばれてゐることを見て來た。

このことは、峠道が出来上るためにのみ説明される言葉ではない。

あらゆる陸の交通、それから海の交通路も、かういふところがながい時間のあひだにいろ／＼の經驗から選ばれたのである。

まづ第一に最も近いところが選ばれてゐる。しかしそのところが如何に近いといつても、そこを通るために、餘りに勞力を拂ひすぎるところは避けられるであらう。

また近いといふことの條件には、距離の問題以外に時間がかゝらぬといふことが含まれてゐるであらう。

しかし、かういふ場合も考へられる。若し勞力はより多くかゝつても、時間が非常に短くてすむ道があるとすれば、ある人々はそこを選んで山を越えるにちがひな
5。

峠の道は、かういふやうにいろ／＼の條件が、からみ合つて、自然に一つのところが選ばれたのであるが、いづれにしても人間が作るものであるから出来るだけ犠牲を拂ふことを避けてゐる。

かういふことから考へて見ると、峠のもつ意味は、他の交通路のことにあてはまるやうに思はれる。

國から國へ、都會から都會へ、村から村へと走つてゐる鐵道もまた同じやうな約

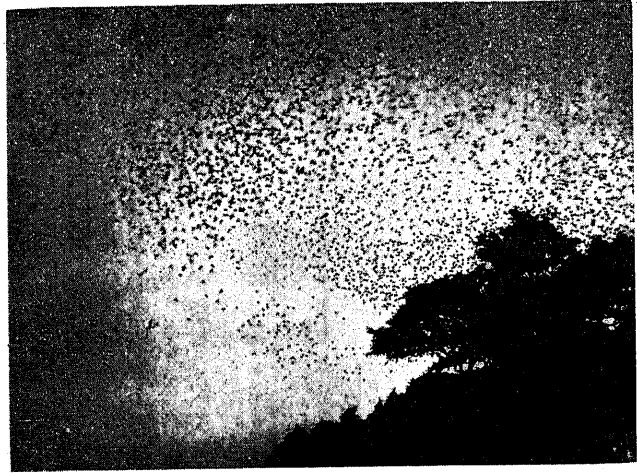
束をもつてゐるであらう。そして私達がこれからこの本で知らうとするトンネルといふものが丁度山道の峠にあたるものと考へてよいのである。

旅するものにとつて、このことは自然に選ばれた共通のことになりがひない。私達は少しく目先を變へて、春來て秋に去り、また秋來て春に去つてゆく、渡り鳥のことを考へて見ようか。

彼等は何千軒の海上をはる／＼と飛んで來る。つばめを例にとれば、その仲間の六〇%近くのものが、主として海上でたふれるといふことである。こんな大きな犠牲を拂つてまでも遠い國にはる／＼と渡つて來る彼等も、きつと陸の旅行者と同じやうに、その道の選擇には大變な苦心をしてゐるのであらう。

陸と陸との間の海をとぶときには、彼等は岬から岬へ飛ぶといはれてゐる。

この岬と岬との間は、海の幅は狭いところである。こゝは丁度山の方でいへば峠



第5圖 渡り鳥の大群

にあたるといふことが出来るであらう。彼等は祖先からつたはつて来た永い経験でこの海の峠ともいふべきところを知つてゐてそこを通るのであらう。

また渡り鳥が、陸地の本當の峠を選んで山脈を越えるといふことは、實際に行はれてゐることである。ツグミといふ鳥は、秋になると大群となつて大陸から日本へやつて来るのであるが、彼等は日本海を渡つて内地へ入ると、山々の峠を越えて行く。その時、

人間はカスミ網あみといふものを彼等の通路である峠に張る。夜明け方にそこを通る彼等はその網のために無数にとらへられるのである。

渡り鳥は、彼等の生活と、彼等の子孫の蕃殖はんしょくに都合のよいところを求めて歩くのである。渡り鳥の中で、最も遠く旅行をするのは、極アジサシききくといふ小鳥であるが、その道のりは北極から南極まで、また南極から北極までの二萬軒以上を、そのかばそい羽をもつて飛んでゆくのである。

雪の多いところにすむ人間が暖い地を憧れあこがれ、寒い山間の地に住む人が明るい暖國を憧れる。そして峠を越えてゆくと、この渡り鳥達とが同じやうなことをしてゐるやうに見えるではないか。

峠の下を

太陽の光なしには、一日も生活出来ぬ我々が、實は日ごろ太陽のことを餘り考へない。かういふやうな實例は、私達が少しく自分の周囲を見廻はして反省すれば非常に澤山見出されるのである。

何故に人間がさういふ態度で生活してゐるのであらうか。折があれば諸君は、自分で少しくそのことを考へて見るがよい。

諸君は、恐らく幼い時から汽車に幾度も乗つてゐるであらう。そして大きいか或は小さいか、トンネルを通つてゐるにちがひない。

トンネルとはどんなものであるかといふことを、こゝで改めて説明しなくてもよいであらう。さう思つて私はこの本ではすでにいきなり、トンネルといふ字を前に使つて置いた。

それはともかくとして、諸君も初めてトンネルを通つた時には、車内に電燈がつき、急に外の景色が見えなくなり、やかましい音がし出したので驚いたであらう。若し長いトンネルであつて、數分もかゝつて通過したときには何となく不安を感じたにちがひない。

このやうな經驗は誰でもしてゐるのであるが、いつの間にかトンネルにもなれてしまつて、汽車がトンネルに入つても誰も騒がない。本や新聞を讀んでゐる人は、まるで汽車がどこを通つてゐるのか氣がつかずにゐる様子である。

また、トンネルに入つたとき電燈が暗いと、頗る迷惑さうに舌打ちしてよみかけの本をとぢる人もある。

しかし、さういふとき私達は一ぺんでもよい。トンネルといふものがどんなものかを考へて見たい。

まづすぐに考へられることは、そのとき汽車は、或る山の下を通つてゐるといふことである。このことは何も、改めて説明する必要もないことである。わけなくのぼれるやうな低い山ならば、汽車はそのまゝのぼつてゆくであらう。それが急な勾配であつても、若し小さい山なら、掘り割つてしまへばトンネルにする必要はない。實際にも少し汽車の窓から外を眺めてゐれば、このやうな掘割りをぢきに見ることが出来る。大體高さ二十米までのところは、掘割りとしてしまふのを普通としてゐる。

して見ると、トンネルは、二十米以上の山にあげられるものであることがわかる。そのやうに鐵道が山にぶつかつた場合に、トンネルを掘ることは厄介だから出来ることならば、鐵道は、その山を避けて通るのが普通である。その場合に、非常に時間の損失があつてはならぬ。また一つの山を避けるために、汽車を動かす動力や石炭を澤山に消費することは、長い間には莫大な損失になるから矢張り避けられる。トンネルを汽車が通過するとき、眼をとちて思つて見るがよい。自分がいま、どのやうな山の下を通つてゐるかを。

山であるから、必ず峰がある。その峰は一體どんな形をし、どんな地點にあるであらうか。

トンネルの半をすぎるときは、恐らく、その山の一番高いところの眞下を通つてゐるのであらうか。或はまた峰の下を避けて通つてゐるのであらうか。

私達の汽車が、假にいまトンネルの東の口から入つて西へ進んでゐるとしよう。丁度半までは、その上の山を流れてゐる水があるとすれば、東へ流れてゐる筈であ

る。汽車が半を過ぎたのちには、こんどは水は西の方へ流れてゐるわけである。

若し非常に大きな山脈を貫いてゐるトンネルであつたなら、汽車がトンネルへ入る前の氣候・風景と、出てからの氣候・風景は一變するであらう。

若しまた、山の頂上を境として二つの國があつたとすれば、トンネルを通りぬけたときは他國へ出たことになるのである。

まあ、そんなことはともかくとして、トンネルを通るとき諸君に考へて貰ひたいことがある。まづ、これはどんな必要があつて計畫されたかといふことである。次にはこゝを選んでトンネルを作らうとした人は、どんな考へで、それが出来るまでには、どんな苦心をしただらうかといふことである。

また、暗い、危険な恐ろしい地の下に働いて、トンネル工事に従つた労働者達はどんな苦勞をしただらうか。一本のトンネルを掘るのには、どんなに多くの過去の

經驗が働いてゐるか。またどんなにいろ／＼の方面の學問が動員されてそして協力してゐるか。どんな小さな問題の解決にも經驗や學問が、どんなに見事に使はれてゐるかを知つて貰ひたいのだ。知つて貰ふだけでなく、これをたつた一度でもよいから、諸君に考へて貰ひたいのだ。トンネルを通るたびに、そのやうなことを考へろとは要求しない。

こゝまで来て、私達のこの本は、いよ／＼トンネルの話に入る段取りになつた。